

公運動の指導者としての組織の中にいる人々であるかどうかは問題であるが、その點は奉公會において人選を考慮してもらへば良いことであつて、議員の側としては各自がその分擔する奉公運動との聯繫において論題を検討すべきであつた。今回討議されたことは、地方に持ち歸つて實踐してみる。さうしてそれが種々な障害につきあたれば、地方的に解決し得ないことは、次回の協力會議にもち込む、かやうにして中央と地方とが互に血脉を通じ、眞に打てば響くやうに創り上げねばならない。上意下達とか下情上通といつた言葉は使用が便利であるから使つてゐるのであるが、中央と地方とが上意とか下情とかといふ言葉では言ひ表はされない一體感を創り出すやうになくてはならない。

奉公班が國民組織の下部組織であることは理念の上では知つてゐるが、なにか行政組織の下部組織であるかのやうな實感のするには、たしかに上から來る負擔の加重が重く、奉公班の事情が上部組織にまで達する組織が整備されてゐない點にも原因があると見切れる。

さて、去る五月十九日の臺灣新報紙上に、督府後藤保安課長の「破壊と建設」と題せる一文の中に次の二節がある。

「大東亞戰爭始まつて以來、本島同胞の皇民としての進歩は領臺四十

## 本島青年に寄す

林 茂 生

去る五月十九日の臺灣新報紙上に、督府後藤保安課長の「破壊と建設」と題せる一文の中に次の二節がある。

「大東亞戰爭始まつて以來、本島同胞の皇民としての進歩は領臺四十

しかし、この戦時下の國民組織としてはすべて國民生活の決定は上から來るので國民はこれをいかにして運営してゆくかの問題が與へられてゐるのである。負擔の加重そのものを軽くするといふことは、現在では問題とはならない。要は之をいかに合理化するかといふことである。今回の協力會議が奉公班とつながつてゐるものであるといふ實感は、おそらく人々に懐かれなかつたことと思ふ。協力會議は臺灣一家の家族會議であつて、隣組常會の總常會であるが、それが實感を以て感じられなかつたとしたならば、その據つて

来る理由を反省しなくてはならぬ。まづ奉公班の常會を下部組織とした、ピラミット型の上に協力會議を置くこと、そして、このやうな地域的構成とは別途に、職能別の議員を附加して、その缺陷を補ふこと等である。その上に更に必要なのは常會に折角現はれてゐる親和感と一體感とが奉公運動の上部組織に至るほど、行政力に押されて失はれて行くことに対する、適當な工夫を考究すべきで、この常會の親和感が協力會議にまで浸み出でてくるやうになれば、この上ない成功である。

(臺北帝大教授)

殊に青年諸君は、斯くお褒めの言葉を頂戴したからと云つて現状を以て足りりとせず、時局の緊迫につれ、益々奉公の赤誠を端して然るべきであることは論を俟たないのである。本島青年同胞諸君、今や全島民總蹶起運動の警鐘が鳴り渡つて居る。此の六月一日を期して、全島民は皆働くに、生活に、貯蓄に、將また防衛に物心兩方面から全島要塞化へ總力を結集すべく起ち上がらなければならぬのである。併しながら、總蹶起の先頭に立つものは何と申しても青年諸君である。戰局は時々刻々變轉する。兵站基地の臺灣は、既に攻防基地の臺灣に、その性格が變つたと云はれて居る。われらの國土はわれら自からの手で守らなければならぬ。そのために先づ第一に要求さ

れるのはわれらの勤労の熱汗である。本島青年は既に兵站基地臺灣の爲めに、増産勤労の熱汗を惜みなく國家に捧げて來たことは事實である。筆者は曾つて、新豊郡下の看天田改良工事を見に行つたことがある。折悪しく烈風吹きすさみ、砂塵濛々の中に、幾隊の青年男子が黙々として不毛の看天田へ土砂を運んで居た。その逞しい姿は、今でもまさと筆者の目に映つて来る。而もまさに配するに、一隊の女子挺身隊の共同炊事の姿を以てした。何たる尊い増産熱汗の姿であらう。之れは單に筆者の狭い見聞の中の一経験に過ぎない。此の種の姿が、大なり小なり大東亞戦争以來全島到る處に見出されることは云ふまでもない。然れども、今は攻防基地としての臺灣の爲めに、更に之れ以上幾倍かの國防勞務の熱汗が要請されて居る。現にそれに挺身して居る本年青年諸君は、萬を以て數へられると云はれて居る。筆者は此の稿を草するに當り、ふと目に浮んだのは大稻埕方面の有識者層を幹部として、近く某地點の作業に赴かんとする護國挺身隊の雄姿である。その意氣の盛なる、その

責任感の強大なる、實に頗もし限りである。恐くは、今後も必要に應じて此の種の挺身隊は續々と現はれるであらう。筆者は、何となくある種の奇蹟に近い皇民としての希望の光が、本島青年同胞諸君の上に輝いて居るやうな氣がしてならないのである。然り、青年諸君の熱汗があればこそ、全島民は皆勤までに導かれ得るのである。

青年同胞諸君、國家はまた近く實施されるべき徵兵制に依りて、われわれの殉國の鬪魂を要請する。之れは取りも直さず、一死君國に殉ずるの精神を以て第一線に立てとの嚴肅にして光榮なる要請である。みたみわれ、大君にすべてを捧げまつらん」とわれくは誓ふ。世に命の入つて居ない「すべて」を考へて居る人があるかも知れないが、命の入つて居ない「すべて」は「すべて」ではない筈である。此の命の入つて居る眞の「すべて」を國に捧げ奉る光榮にして嚴肅の事實が到來しつゝあるのである。こゝに死生を超える、殉國の鬪魂が要請される。而して本島の青年同胞諸君が、此の殉國の鬪魂を盡

量に發揮すると否とは、獨り戰局の成敗に關係するばかりではなく、實にまた島民の皇民としての運命の浮沈を決定する關鍵である故、諸君の負荷する使命が如何に重大、諸君に對する全島民否全國民の期待が如何に絶大なるかは贅言を要しない。青年同胞諸君、最後ではあるが諸君には一つ重大なる使命が残つて居る。それは日本國民としての興亞の指導的使命である。無論われらの目前唯一の目標は、仇敵米英撃滅の次に來たるものは、興亞の大業である。だが何と云ふ愉快な仕事である。だが何と云ふ愉快な仕事であるのではあるが、愈々聖戰完遂の次に來たるものは、興亞の大業である。廣漠幾万里の地域に亘る無盡藏の資源が、諸君の建設開發を待ち構へて居る。永年アングロサツクソンの桎梏の中に呻吟して居た十億近き大東亞の同胞が、諸君の指導を迎へようとする。有史以來未だ曾て斯くの如き欣快なる壯舉のあるを知らぬる。昔歴山大王が、まだ王子であった頃父君フイリップ王の・盛んに近鄰諸國を懼伏せしめつゝあるを見

くなるであらう」と、髀肉の嘆を洩らしたと云ふ話がある。此の言は奇矯に失し、ともすると歴山王子は不孝ものだと譏られる虞がないでもないが、併し當時の青年歴山が歐亞に跨がる、一大帝國の建設を夢見つゝ満々たる自信を以て、腕を鳴らして居たことは彼の此の言を通じてもよく解るのである。歴史は繰返すものである。今日の日本青年は、一面に於て腕試しの好機を夢見つゝある點は、當時の歴山王子に彷彿たるところがあるのであるが、その好機を逸する心配の全くない點は、歴山王子よりも恵まれて居るわけである。然り、大東亞共榮圈の指導者たることは、皇國日本青年の宿命であり、茲に於て始めて天業翼賛、八紘爲宇の實想が具現されるのである。而して、指導的實力と、度量の持主のみが、指導者たり得ることは申すまでもない。

本島青年諸君、諸君の前には皇國としての天業翼賛、八紘爲宇を顯現する時が既に來つゝあるを銘記せず自分代になつてなすべき仕事がな